

森
繁夫著

人
物
百
談

三
宅
書
店

自序に代へて

第一話

『近頃はどうも君の世界になつたね』

『どうして』

『どうしてつて、世は今、でんきの世界ぢやないか、しかし、まあ段々でんきが明るくなつて

来て、結構は結構さ』

『そんな事はないよ。電氣は段々暗くなつてゐるのに』

『違ふさ、傳記書が續々刊行されて、全く君等の世の中だといふのさ』

『ああ、その傳記か』

『今迄に随分新聞雑誌に書いたものや、放送講演などの記録があるだらうが、それを一つ纏めて出したらどうだ』

『さうさなあ』

「そんな氣乗りのしない返事は驚くね。なにしろ基礎があるんだから、それを整理すればいいぢやないか」

「まあ考へて見よう」

第二話

『どうしたい其後？』

「あれからいろ／＼考へたがね。不思議にも同じやうな勧誘をあちこちから受けたので、思ひ切つて遣らうと極めた矢先に、本屋の方からも出したいといふ希望があつたので、いよく決心したよ」

『どんな構造だ』

「傳記關係の舊稿を調べて見ると、大體長いのや短いのやらで百位はあるが、そのうち今出せないやうなものもあるし、同じやうなものもあるので、三分の二位探つて、あと三分一は新稿を起して、まづ百と纏めるつもりだ」

『どういふ題目にするね』

「表題といふものは中々むつかしいもので、旨い案もないが、まあ簡明に『人物百談』とでも、しようかと思つてゐる」

第三話

『いよく原稿を印刷に廻したさうだね』

「難有う。漸く曲りなりに纏めたよ。さて揃へて見ると、いろく疵が出て、我ながら感心しない點が多いが、まあ仕方がない、藜喰ふ虫をたよりにするさ」

『久しぶりの出版だから、多少まごついただらう』

「いやもうへまなことばかりで、初め三四百頁のつもりで手續をしたところが、途中で勘定して見ると、到底それでは足りない。そこで、本屋に事情を話して、訂正のことにしたのがまた行違が出来て、六百何十頁三圓五十銭といふことになつて仕舞つた」

『挿圖はどうした』

「著者としては一談毎に一圖を入れて、百圖にしたいのだが、いろ／＼都合があるのでさうもならず、大體四十餘り入れることにした」

『それでは君、寫眞版がそんなに澤山入つて、一頁が六厘弱ぢやないか。今時そんな安い本はなすね』

『どうも後の祭りで仕方がない。百談で三圓五十錢だから、一談で三錢五厘さ』

『新資料に基く苦心の作と稱するものが、三錢五厘とは著作家もつらいもんだね』

『御同情忝す』

『ところで表紙はどうした』

『さあそれがさ、どうも月並では面白くないと思つて、楠瀬日年さんに相談した結果が、この見本のやうな譯だ』

『これは立派だ』

『小堀遠州が表具裂に苦心したのは有名な話で、其の文献は澤山ある。この本文の中にもそれがあるので、圖案をそいつの現物から採つた、清水裂といふ名物裂を原色版にしたところを買つて貰ひたす』

『いやに凝つたね。しかし、この表紙なら相當に本が賣れるだらう』

『もしく、では表紙のお蔭で賣れるといふのか』

『いやまだある』

『それは』

『安いから賣れるよ』

『ふむ、表紙が好いのと、安いので賣れる。すると、つまり中味は……』

昭和十八年正月

著
者

目次

一	紀伊國造の末葉	一
二	水無瀬家の人々	三
三	西行法師終焉地の話	八
四	藤原家隆の影像	二五
五	藤原定家の歌合批判	三〇
六	豊太閤の風藻	三三
七	千利休	四〇
八	古織茶湯傳	五〇
九	松花堂消息	五七
一〇	遠州と表具 <small>小堀政一</small>	六三
一一	琉球人の詠んだ和歌	六九
一二	安部春貞一家	七六
一三	谷衛廣とその臣下	七三
一四	北村湖春系譜略	七七
一五	北村正立系譜略	七九

一六	中西信慶と契沖・長伯・長雅	八三
一七	橘三喜の年譜	八九
一八	白 幽 子	九四
一九	町人學者と羽間家の人々	一〇〇
二〇	勝部芳房の百首詠草と入江相尙	一一一
二一	天野信景の享年	一一五
二二	有賀長伯家の代々	一二七
二三	女師匠圓山賀納	一三五
二四	隱 口 先 生 〓 柳 瀬 方 藝 〓	一三九
二五	三輪執齋の歌	一四九
二六	加藤信成略系譜	一五七
二七	加 藤 景 範	一六三
二八	梁田蛻巖と奴小萬	一六八
二九	岡部眞淵の手紙	一七三
三〇	森繁子の呼稱	一七七
三一	建部綾足の跡目	一八三
三二	冷泉村出家の日	一八七

三三	涌蓮法師の歿享年	一九〇
三四	大雅堂雜考	一九三
三五	浮鯛の話 <small>高橋圖南</small>	二〇五
三六	金谷與般の一家	二〇九
三七	近世畸人傳の著者 <small>三熊思孝・伴蒿蹊</small>	二一一
三八	書 <small>淫</small> <small>江田世恭</small>	二一七
三九	小澤芦庵と涌蓮法師	二三一
四〇	長久保玄珠の手紙	二三四
四一	松平康定と本居宣長	二三九
四二	本居宣長の手紙	二三三
四三	本居大平の手紙	二三六
四四	小 篠 敏	二四二
四五	上田秋成の茶匣	二五一
四六	加藤千蔭と手柄岡持	二五七
四七	松平樂翁夫人	二六〇
四八	一茶の像	二六三
四九	香川黄中の自負	二六七

五〇	大歌人香川景樹……………	二六九
五一	香川景嗣と詩畫……………	二七四
五二	穗井田忠友の手紙……………	二七七
五三	熊谷直實の裔孫直好……………	二八四
五四	蜀山人揮毫の掟……………	二八六
五五	北山詩集の作者 〓徳龍召靈〓……………	二八九
五六	北越と年少雅人……………	二九二
五七	良寛の木像……………	二九五
五八	頼山陽の歌……………	二九九
五九	蓮阿のことども……………	三〇四
六〇	宇津木静區と九霞樓……………	三〇九
六一	三代目中村歌右衛門……………	三二三
六二	山本季鷹年齢考……………	三四九
六三	一井倭文子……………	三五五
六四	平田篤胤の手紙……………	三六〇
六五	平田鍊胤の手紙……………	三六五
六六	千種有功門人帳……………	三七〇

六七	中島棕隱と雪百首	三七五
六八	鹿持雅澄の居址	三八〇
六九	鹿門の人々 <small> </small> 鹿持雅澄十哲等 <small> </small>	三九一
七〇	吉田松陰殉國詩歌集	三九六
七一	會津歌人に就て	三九八
七二	田中河内介の誠忠	四〇六
七三	鍋島直與の文雅	四二九
七四	香坡餘香 <small> </small> 橋本香坡 <small> </small>	四三五
七五	中岡愼太郎	四四三
七六	歌人としての阿波宰相 <small> </small> 蜂須賀齊裕 <small> </small>	四五九
七七	日柳燕石	四七三
七八	城兼文と殉難草集	四七九
七九	櫻井武雄	四八二
八〇	野之口隆正の戯歌	四八四
八一	可部安都志	四八六
八二	可部赤邇	四八九
八三	中山宮子	四九一

八四	蓮月尼の繪	四九六
八五	彦根譚人傳 野津基明	五〇〇
八六	後醍醐院眞柱	五〇四
八七	乾 百内	五〇七
八八	廣 田 彦 磨	五〇九
八九	加藤安彦と橋村淳風	五一一
九〇	津 田 出	五一四
九一	新年の歌	五三〇
九二	幕末志士の歌	五三九
九三	近世女流歌人物語	五五二
九四	干支から採つた名	五五五
九五	書壇有名人無名人	五六七
九六	偉人の幼年少年時代	五七六
九七	多 作	五八一
九八	家 號	五八八
九九	辭世漫談	五九三
一〇〇	肖像と畫像	六一一

昭和十八年七月十日印刷
昭和十八年七月十五日發行
(發行部數二〇〇〇部)

出文協承認F210711號
會員番號 132004番

人 物 百 談

定價 金三圓五十錢
特別行爲稅相當額三十五錢
合計 金三圓八十五錢

著 者 森 繁 夫

發行者 三 宅 莊 藏

印刷者 新日本印刷有限公司
(西大七四)

發行所 三 宅 書 店

配給元 日本出版配給株式會社

振替大阪六六九番
電話本町(24)一六三六番

大阪市東區橋堀四丁目三番地